

## 親鸞聖人における社會觀の構造

柏 原 祐 泉

近時の歴史學の側からの親鸞聖人に對する研究課題の一は、護國意識や社會的實踐などの問題を分析することにより、聖人が既成教團や社會に對し如何に對應したかという、その時代社會との交渉關係の問題に集注している。しかし、建仁元年に本願に歸して以後、われわれに具體的に姿を示す聖人の立場は、あくまで純教法的な他力的信を基盤とする報佛恩の精神により終始一貫されるものである。この超歴史的な立場が、もつとも明確にうち出されたのは、いうまでもなく教行信證においてである。そこでは佛法と世法とが截然と區別され、佛法は現實の社會關係や政治・權力關係になんら拘束されていない。したがつてその製作の背景に何らかの現實的、政治的意味を見出そうとする見解には賛同し得ない。

しかしながら、晩年の關東における教團的動搖や善鸞事件を介して、正像末和讃・御消息集などにはかなり具體的な既成教團や社會に對する批判があらわれ、歴史的な展開を示すようになる。そしてそれは、教行信證・淨土和讃(特に初稿本)・高僧和讃の正像千五百年説から、太子和讃(七五首)・正像末和讃の正像二千年説へと變化する最も具體的、時代的な聖人の末法觀により支えられている(拙稿「親鸞における末法觀の構造」大谷學報三九―二、参照)。そして、この批判は以後においてより深まり、より具體化してゆく。しかしこの場合の社會・教團

批判も、基本的には教行信證以來の他力的な報佛恩の立場に基くものであつて、これを聖人の社會觀の基本構造としてとらえなければならぬ。ただ關東教團動搖・善鸞事件以後においては、それまでの超歴史的な他力的信の立場が歴史的な場において限定され具體化されてくるのである。この面から特に聖人の現實的、社會的な實踐性と、時代に對する對決の仕方とが出てくるといえるのであるが、この間の具體的論證については他日を期したい。

## 宗祖歸洛についての一考察

佐々木 蓮 磨

宗祖歸洛の理由については、學者によつていろいろな説が立てられているが、私は聖覺に會うということが一つの大きな理由ではなかつたかと思う。それは、宗祖が寛喜二年の五月二十五日(五十八歳)聖覺の唯信鈔を始めて筆寫され、翌三年四月四日にかの有名な寛喜の内省があり、引きつづき歸洛されている事實と、歸洛後、聖人の上に聖覺が大きく現われてきた事實とによるのである。

先ず唯信鈔の披見と寛喜の内省につき、宗祖が唯信鈔によつて、異常な啓發を受け、晩年は唯信鈔を選擇集の正しき祖述と見、聖覺を恩師法然の後身と仰いで、行かれたことは事實である。そうした觀點からすると、唯信鈔の披見は、宗祖にとつては吉水入室に次ぐ精神的な轉機と見てよからう。宗祖が唯信鈔